

福岡工業大学 学術機関リポジトリ

佐藤一斎の『言志四録』にみる「学び」のための心の工夫

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): "Genshishiroku", (言志四録), 'Having Will', 'Humility', 'Suppleness', Mind of Gratitude', 'Kei', (敬) 作成者: 上寺, 康司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/11478/00001579

佐藤一斎の『言志四録』にみる 「学び」のための心の工夫

上 寺 康 司 (社会環境学科)

**Methods of Mind Training for 'Human Learning',
Contained by "Genshishiroku" (言志四録) by SATO Issai (佐藤一斎)**

Koji KAMIDERA (Department of Social and Environmental Studies)

Abstract

I define the human learning as the working of training oneself in order to realize oneself over bringing out his personality, premised on coexisting with others in the society and contributing to the continuance and development of the society. I devise four components of the human learning, that is, 'Having Will' as driving the human learning, and three elements of the human learning that is 'Humility', 'Suppleness', 'Mind of Gratitude'. In this paper, I analyze and consider the methods of mind training through practicing the above four components of the human learning, based on the thoughts of the ancestor, that is, "Genshishiroku" (言志四録) by SATO Issai (佐藤一斎), who was the scholar of the Confucianism in the Edo era.

Key Words : "Genshishiroku" (言志四録), 'Having Will', 'Humility', 'Suppleness',
'Mind of Gratitude', 'Kei' (敬)

I. はじめに

いつの時代においても、人間は、人間としてこの世の中に生まれてきて、自分がいかに生きるべきか、人間として果たすべき使命とは何かをしっかりと考えるとともに、自分がどのような人間になるかについての志を立て、その志のもとに自らを磨いていく存在である。人間にとっての「学び」、「学」とは、孔子によれば「修己治人」の学となる。すなわち「修己治人」とは「己れを修め、自己の人間を完成することが、そのまま国家社会に有用な人間となること」¹⁾であり、知的なものである「修己」と行的なものである「治人」

とは、それぞれに軽重はなく、従って儒学の中の朱子学においては「知行並進」、陽明学においては「知行合一」と言われている²⁾。この「修己治人」を現代社会に生きる人間の「学び」にそのままあてはめてもよいが、学校教育を含めたすべての「学び」として、筆者は今日的な「学び」を「社会において他者と共生し社会の存続発展に貢献しつつ、自らの個性を生かしながら自己実現を図るために、自らを人間として磨く営み」と定義したい。以下この意味合いで「学び」をとらえていく。

さて、人間の「学び」には、その「学び」のための動機、そして「学び」の推進力となるパワーの源泉が必要である。それが「志」であろう。人間の心の中に確固たる「志」が立ったとき、すなわち「立志」が成立したときに、「学び」の意欲が沸き起こり、動機付

けがなされ、そして「学び」を推進していくパワーがあふれでてくると思われる。

次に、「学び」の推進力としての「立志」が成立し、人間が「学び」を行っていくためには、その「学び」がスムーズに展開していくための3つの要素が必要であると筆者は考える。これら3つの要素とは、「謙虚さ」、「素直さ」、「感謝の心」である。これら3つの要素は、学ぶための心に内包されているものであるが、これら3つの要素を筆者は「学びの三要素」ととらえている。「学び」の推進力としての「志」を立て、「学びの三要素」を自らに実践することそれ自体が、自らを人間として磨くことでもあり、人間の「学び」ともなりうると思われる。しかしながら、「学び」のための「立志」と「学びの三要素」を実践するのは容易ではない。実践に際しての心の在り方・持ち方をコントロールするための心の工夫が必要となる。

この「学び」のための心の工夫を実践する際に、有益な示唆を与えてくれるものとして、先人が培った人間の在り方生き方に関する思想があげられるだろう。

そこで、本稿では、人間の「学び」のための「立志」と「学びの三要素」としての「謙虚さ」、「素直さ」、「感謝の心」の実践のための心の工夫について、人間の在り方生き方を示した先人の思想に基づき、考察を加えていきたい。

本稿で取り上げる人間の在り方生き方を示した先人の思想は、江戸時代末の儒学者である佐藤一斎（1772～1859年）³⁾の『言志四録』⁴⁾である。

佐藤一斎の『言志四録』を本稿で取り上げる理由は4つある。その1つは、佐藤一斎自らが生涯にわたる「学び」の体現者であったからである。そのことは、佐藤一斎が、70歳にしてその当時のトップの学問・教育機関である昌平黌（昌平坂学問所）の儒官に登用され、88歳で亡くなるまで、知力・気力の衰えなく、重職を全うしたことからも伺える。その2つには、佐藤一斎が著した『言志四録』は、人間としての「学び」の修養・工夫からにじみでた随想録、人生の書、人間としての在り方生き方を指南した書として、多くの人に読み継がれてきたからである。加えて言うならば、その『言志四録』には、今日の生涯学習社会にも有用な「学び」の知恵が豊富に盛り込まれているからである。たとえば、『言志四録』の1冊である『言志晩録』第60条、すなわち「少くして学べば、則ち壮にして為す有り。壮にして学べば、則ち老ゆとも衰へず。老いて学べば、則ち死すとも朽ちず。」は、「三学戒

として有名であり、人間にとっての生涯学習の重要性を述べた条文として、随所で引用されている。その3つには佐藤一斎の『言志四録』には、人間の行動力・実行力の源泉としてのパワーが内包されていると思われるからである。そのことは、西郷隆盛を始めとする明治維新の実現に尽力した幕末の多くの志士たちにも愛誦されたことや、特に西郷隆盛にあつては、『言志四録』から会心の101か条を抜粋、抄録し、絶えず座右に置き、自らの行動の指針としたことから明らかであろう。その4つには、佐藤一斎の『言志四録』は、全体を通して寸鉄録風に書かれた条文によって構成されており、条文それ自体や、条文を構成する一節、さらにそれらに内包された漢語そのものが、人間の心に響き、影響を及ぼし、人間の「学び」に有用と思われるからである。

Ⅱ. 佐藤一斎の『言志四録』にみる

「学び」の知恵

1. 「学び」の推進力・パワーの源泉としての「立志」

「立志」は、人間の「学び」の推進力であり、「学び」のパワーの源泉であるが、その「志」を立てる前提として、自らが人間としてこの世に生まれた意味を省察することが必要となる。佐藤一斎は、『言志四録』第10条において、「人は須らく自ら省察すべし。天何の故にか我が身を生出し、我れをして果して何の用にか供せしむる、と。」と述べている。すなわち人間は、この世に人間として生まれてきた意味を自らに問い直し、人間としていかに生きるかを熟考する必要がある。何のための人生なのか、充実した人生とは何か、自己実現とは何か、等をしっかり和内省し、自らの在り方生き方を決めていくことが肝要となる。

「志」とは、自分がいかに生きるか、どのような人間として人生を送りたいか、また1度きりの人生において何をなすべきかを深く自らが考えて、心に立てる大きな柱（目標）である。それが心に深くそして確固たるものとして立つためには、自らの主体的な意志が必要となる。教育者にあつては、子どもたちに、人間としてこの世に生まれてきた意味とこれからどのような人生を送るべきか、人は何のために生きるのか、充実して生きるとはどういうことか、等について、考えさせるように適切に指導することが必要となるであろう。

佐藤一斎の『言志四録』の中には、「学び」のため

の「立志」の重要性に関連した条文が随所に見られる。ここでは、その中から『言志録』第6条、第32条、第123条、『言志叢録』第27条、第328条を取り上げて、内容を紹介する⁶⁾。

『言志録』第6条には「学は立志より要なるは莫し。而して立志も亦之れを強ふるに非ず。只だ本心の好む所に従ふのみ。」として、「学び」のための「立志」の重要性が簡潔に記されている。また「志」は、他者から強制されて立てるものではなく、自らの本心にしたがって、自らの主体的な意志をもって、立てるべきであることを述べている。

『言志録』第32条には「緊しく此の志を立てて以て之れを求むれば、薪を搬び水を運ぶと雖も、亦是れ学の在る所なり。況や書を読み理を窮むるをや。志の立たざれば、終日読書に従事するも、亦唯だ是れ閑事のみ。故に学を為すは志を立つるより尚きは莫し。」と記されている。しっかりとした「志」を立てていれば、日常生活の具体的な活動の中に学問があり、活動することによって人格を陶冶することができる。「志」を立てている人間は、日常生活そのものを、自らの「学び」の場、自らを人間として磨く場として活かせることになる。生活の中で人間の本体をつくることの重要性が伺われる。

『言志録』第123条には「人は少壯の時に方りては、惜陰を知らず。知ると雖も太だしくは惜しむには至らず。四十を過ぎて已後、始めて惜陰を知る。既に知るの時には、精力漸く耗せり。故に人の学を為すには、須らく時に及びて立志勉勵するを要すべし。不ざれば則ち百たび悔も亦亦竟に益無からむ。」として、少壮すなわち10代・20代・30代の若者が、矢のように過ぎ行く時間の大切さを認識し、その時間を有効に活用し、将来のためにしっかりと「志」を立てて勉め励むことの重要性を強調している。40歳から60歳までの人生の最も盛りの時期に大業を為すためにも、10代・20代・30代に明確なる「志」を立てて、学ぶこと、自らをしっかりと磨くことの重要性を強調しているのである。この「立志勉勵」は、短い4字の漢語であるが、学ぶために「志」を立て、「学び」を推進していくための力強いパワーが秘められている言葉であるように思われる。似たような4字の漢語に「刻苦勉勵」という言葉がある。この「刻苦勉勵」という言葉は「立志勉勵」と同じく、学ぶために自らに厳しく、勉め励む言葉であるが、「刻苦」の部分に、「学び」に対するつらさや厳しさ、苦しさが現れていて、学びを

積極的に前向きに推進するパワーが感じられないように思われる。「立志勉勵」という言葉で若者に対して、人生における「学び」のための工夫を前向きに説いた佐藤一斎のセンスのよさが感じられる。「立志勉勵」には、「学び」を志す今日の子どもたち、大人たちに「学び」を推進させるパワーがみなぎっていると思われる。

『言志叢録』第328条では「人生、二十より三十に至るは、方に出でんとする日の如く、四十より六十に至るは、日中の日の如くにして、盛徳大業は、此の時候に在り。……少壯の者は宜しく時に及んで勉強し、以て大業を成すべし。」と述べられている。この条文には、「立志」の文字はみられないが、内容的に言えば、『言志録』第123条と同様のことを言っている。40歳から60歳、言ってみれば人生の最も華やかかりし時期において、「盛徳大業」を為すために、少壯の者が時に及んで勉強すること、すなわち「立志勉勵」を促していると思われる。「勉強」という言葉は、自らが「勉めて強くなる」ことを意味して使われていると思われる。

以上のように「学び」の推進力としての「立志」について、『言志四録』の中より、説得性のある条文を紹介した。『言志録』第6条「学は立志より要なるは莫し」、同じく第32条の「学を為すは志の立つるより尚きは莫し」、同じく第123条の「人の学を為すには、須らく時に及びて立志勉勵するを要すべし」、『言志叢録』第328の「少壯の者は宜しく時に及んで勉強し、以て大業を成すべし。」は、「立志」とそれに基づく「学び」の重要性を強くうたえかけるものを内包していると思われる。

2. 「学びの三要素」としての「謙虚さ」・「素直さ」・「感謝の心」を持つための心の工夫

1) 「謙虚さ」の心の工夫

「謙虚さ」は、他者に対してのうやまいの精神と自らに対する慎みの精神（自らに対する厳しさ）からなるものであり、「敬」の精神と一致するものと思われる。この「敬」は、心にゆるみの生じていない、心が引き締まった状態であり、心が収斂されている状態である。「敬」が心に存している状態にあっては、自らに厳しい姿勢で臨むことが可能であるから、自らを人間として磨くこと、すなわち「学ぶ」ことに対する自らへの厳しさも自ずから生じ、学ぶ者の自覚・覚悟にもつながると思われる。謙虚であるためには、心に

妄念が起らないことが必要であり、そのためにも「敬」を持つことが大切となる。「敬」を心に存しようとする努力することは、自ずから心を磨くことをにつながるるのであり、頭で考えるよりも、心で考えることが可能となる。また、「敬」の精神が心に浸透するならば、それによる心の働きは虚偽のない純粋なものとなる。それが「誠」を尽くすことにつながる。

(1) 学ぶために求められる「敬」の精神

① 「敬」の精神の重要性

学ぶために求められる「謙虚さ」の心の工夫としての「敬」の精神に関連する条文は、『言志四録』に随所にみられる。たとえば『言志録』第154条には「妄念起こさざる、是れ敬にして、妄念起こさざるは是れ誠なり。」とあり、「敬」を持つことの重要性が述べられている。『言志録』第155条には「敬能く妄念を截断す。」と述べられている。すなわちこの条では、心に「敬」を存することによって、心を乱す原因の一つとなる妄念を断ち切ることができると述べている。『言志録』第157条には「敬すれば則ち心精明なり。」として、「敬」の心を持つことを通して心の本体が澄み渡り、妄念や邪念が払拭され、心が「虚」の状態になることができることを指摘している。心が精明な状態であるからこそ、心が現在のことに集中できる。『言志後録』第88条には「敬は勇気を生ず。」と、勇気の源が「敬」にあることを示している。

『言志晩録』第94条では、「敬、^や ^{ゆる} 稍々弛めば、^{すなわ} 則ち経営の心起る。経営の心起れば、^{すなわ} ^{みょうり} 則ち名利の心之れに従ふ。敬は弛むべからず。」と、「敬」を絶えず保ち続けることが必要であり、少しでもゆるんでしまうと、あれこれと作為をめぐるす気持ちとしての経営の心や名声や利益を求める名利の心がわき起こってしまうことを述べている。また『言志叢録』第90条では、「敬する時は、身、強健なるを覚ゆ。」として、「敬」が保持されている状態であれば、精神のバランスがとれており、メンタルヘルスがよい状態であることを示している。「敬」が心に存すれば、心を積極的な状態に保つことが可能であり、従って、身体全体にわたり活力がみなぎった状態になることが示されている。『言志叢録』第286条では「人道は敬に在り。敬は固より終身の孝為り。」として、人が人として歩むべき道は、「敬」の状態を心に保持して物事に臨むことであることを指摘している。また同じく『言志叢録』第287条では、「敬の一字は、固より修身の工夫なり。養生の

げつも、^{また} 亦一箇の敬に帰す。」として、「敬」を持つことが修身の工夫であり、また生命を全うするための秘訣も「敬」を持つことにあることが述べられている。

② 「敬」の精神の具現化

『言志四録』の中で、「敬」の精神を具現化した条文が『言志後録』第33条⁷⁾、すなわち「春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む。」という有名な一文である。

この条は、他者に対しては春風のようにおだやかにさわやかに接し、自らに対しては秋の冷たい霜を踏みしめるように、厳しく接することを表している。言葉を換えれば、他者に対しては寛容に接し、自らには厳しくつとめる、すなわち自らの内面に対する厳しさを的確に表現した条文である。「春風を以て人に接し」は、他者に対する「うやまい」の精神、愛を以って他者を思いやる「恕」の精神を表している。これは社会の中で他者との共生を図るにふさわしい接人態度であり、他者に対する謙虚な姿勢の体現とも言える。「秋霜を以て自ら肅む」は、自らに対しては厳しい姿勢で臨み、自己の誠を尽くす「忠」の精神を表している。原因を自分にもとめ、絶えず自らを磨き、自己の能力を高めていき、自己改善・自己変容・自己向上を図ることを表しているといえる。自らに対する「つつしみ」の精神を表しているともいえるであろう。加えてこの短い条文は、これだけで人間の在り方生き方を簡潔かつ深く示しているともいえるだろう。この条文のみを昇華し、自らのものにするだけでも「学び」のための心の工夫として十分であると思われる。

③ 「敬」を保持するための工夫

「敬」を保持することを「持敬」とか「居敬」という。「敬」を絶えず保持することは、簡単そうで難しい。しかしその努力をし続けることが大切である。

「敬」の精神を保持しておれば、人間関係も円滑にいくことが考えられる。「持敬」、「居敬」を実効あらしめるためには、一人の時に慎み深くすること、すなわち「慎独」が必要となる。この「慎独」の必要性については、『言志叢録』第91条に「居敬の功は、最も慎独に在り。人有るを以て之れを敬するは、^{すなわ} 則ち人無き時に敬せず。人無き時に自ら敬するは、則ち人有る時に尤も敬す。」と述べられている。人は、他の人の前では、慎み深くふるまったり、敬いの精神を態度で示すことが容易にできる。しかしそれは本物の「敬」

ではない。また「敬」を保持することにはならない。「敬」を保持するためには、誰もみていないところ、自分自身のみとしか向き合うことができない場面において、つつしみ深い行動がとれるかどうかである。一人の時に慎み深い行動がとれる人は、当然にして、他の人の前においても慎み深い行動がとれることになる。しかしながら、一人の時に慎み深い行動をとるのは難しい。そこで、慎独のための工夫が必要となる。『言志晩録』第172条では「慎独の工夫は当に身の稠人広坐の中に在るが如きと一般なるべし。」と、慎独の工夫が明解に述べられている。すなわち、一人の時でも、多くの人々が座っている場所にいる時と同じであると想定して行動することによって、「敬」の精神を身につけることができるとされている。

(2) 「学ぶ」ことの自覚・覚悟

「謙虚さ」は「敬」の精神を保持することによって体現できるとしたが、謙虚であるためには、すでに述べたように、自らに対しては厳しく臨み、絶えず自らを磨き続けるための、すなわち「学び」のための自覚・覚悟が求められる。

『言志四録』の中で、特に「学び」のための自覚と覚悟、そして自らを強く鼓舞してくれる条文としてあげられるのが、『言志録』第119条、第121条、『言志晩録』第13条、『言志晩録』第221条、『言志叢録』第17条である。

『言志録』第119条には「士は当に己れに在る者^のを待むべし。動天驚地、極大の事業も亦都べて一己より締造す。」と述べられている。「己れに在る者^のを待む。」とは、自らが培った能力に基づいて何事も行うことを意味している。そして人の力をあてにしてはいけない、という戒めにもとれる。自己を信じ、自己の力を頼みとして取り組めば、いつしか大きな事柄をも着実に成し遂げることが可能であることを示している。当然その時の心は、「誠」に満ちていなければならない。誠心誠意、「誠」をつくす。心は私欲ではなくて「公欲」に満ち溢れている状態である。学ぶ時の覚悟として、己れに在る者^のを待むことが極めて大切である。その覚悟をもって臨むことが大切であり、自分自身で何事も切り開いていくことが肝要である。

『言志録』第121条には「士は独立自信を貴ぶ。熱に依り炎に附くの念、起こすべからず。」と述べられている。「独立自信」という4字の漢語の中に力強さがにじみでている。まさにこの4字の漢語の中に「学び」

の自覚と覚悟が集約されていると思われる。自らの人生を充実したものとするために、そして自己実現を図るために、人に安易に依存するのではなく、自らの能力を高め、自らの力で道を切り開いていく。その覚悟がにじみでている。学校教育の中の生徒指導で言えば、自己指導能力を高めることに通じるものがある。

『言志叢録』第17条には「学^{まな}に志すの士は、当に自ら己れを頼むべし。人の熱に^よ因ること勿れ。……」と、「学び」のための自覚と覚悟を簡潔・簡明に言い表している。「己を頼む」とは、すなわち自らにあるものを信じることであり、そのためにも、日々自らを磨き、自らの能力を高めておく必要がある。

『言志晩録』第13条には「一灯^{あかり}を提^あげて暗夜^{よる}を行く。暗夜を憂^{うれ}ふる勿^なれ。只だ一灯を頼め。」と述べられている。この条は、先行き不透明で変化の激しい現代社会における人間の在り方生き方に力強い勇気を与えてくれる。「一灯」とは、まさに自己であり、さらに言うならば自らが培った資質能力と言えるであろう。『言志録』第119条でいうならば「己れに在る者」といえる。たとえ小さい灯でも、自らの足元を照らすに足るものがあり、またいつまでも燃え続けるものであれば、先行きの見えない真っ暗な世の中においても一歩一歩と前に進むことができる。そのことをこの第13条は言い表していると思われる。

『言志晩録』第221条には「石重し、故に動かず。根深し、故に^ゆ抜けず。人は当に自重^{じぢゆう}を知るべし。」として、「学ぶ」ための自覚・覚悟、そして決意が述べられている。まさに、「学び」に対して不動の姿勢をとり、大きくて重い石のようにどっしりとして揺るがず、大木の根が地中深くまで張り、風雪に耐えうるように構える。そうすれば、学ぶための覚悟と決意はしっかりと固まり、そして「学び」に取り組んでいくための姿勢態度が形成される。学ぶものに勇気を与えてくれる条文であろう。

2) 「素直さ」：心を「虚」の状態に保つ

「素直さ」は、「学び」の三要素の中でも中核をしめるものであり、シンプルではあるが、人間の在り方生き方の中心に位置するものである。「学び」のための「素直さ」とは、「学び」に対して「素直な心」の状態を保つことである。自己実現には、この「素直な心」が必要とされる。この「素直な心」の状態を保つための工夫こそが心を磨くことにつながるとと思われる。

「素直さ」が発揮される心^{こころ}の状態とはどのような状

態であろうか。それは、心を「虚」の状態に保つことであろう。心が「虚」の状態にあるとは、心中に、妄念や私利私欲、克伐怨欲、毀誉得喪、邪心等が満ちあふれていない状態、そして物事にとらわれていない、執着していない心の状態である。その「虚」の状態が、「実」の状態である豊かな心、元気な心、積極的な心の状態を保つための大前提なのである。心は「虚」の状態だからこそ活発に働くことができ、他の人のために反応することができる。「素直さ」は、心に私利私欲、我欲、「おのれがおのれが」という心がない状態であり、それだからこそ相手を受け入れることが可能となるのである。

『言志四録』には、心が「虚」の状態であることの意義・重要性や、心が「虚」の状態にあることによる効用、そして心を「虚」の状態に保つための工夫が随所に述べられている。それらについては次節にて詳しく述べるが、ここでは、『言志録』第19条をとりあげてみたい。この条には、人間の理想的な在り方が、明白簡易に述べられている。すなわち同条には「面は冷ならんことを欲し、背は暖ならんことを欲し、胸は虚ならんことを欲し、腹は実ならんことを欲す。」と述べられている。この条は、妄念や私利私欲、克伐怨欲、毀誉得喪、邪心、等が宿しやすい「胸」を「虚」の状態にすることが、判断力・思考力の源泉である「面」(頭)を冷静な状態にたもち、人間的な温かさが「背」に収斂され、そして実ある行動力の源泉が「腹」に満ち溢れることを述べていると思われる。

(1) 心が「虚」の状態であることの意義・重要性

心が「虚」の状態であることの本質を言いあてている条文に『言志晩録』第86条、『言志後録』第126条、『言志叢録』第108条が挙げられる。

『言志晩録』第86条では、「体は実にして虚、心は虚にして実」と述べられている。すなわち、身体は形をなすが実体がなく、心は形をなさないが活動の主体としての実体をなすものであることを端的に示している。『言志後録』第126条では、「胸中に物無きは、虚にして実なるなり。万物皆備はるは、実にして虚なるなり。」と、胸中を「虚」の状態に保つことの意義を述べている。すなわち胸が「虚」の状態にあるとは、執着心、または妄念、邪心、自分勝手な心、私利私欲、不平不満、我欲等で充満してはいない、そういったものが一切ない状態のことである。その状態であるからこそ、心が現在の対象に向かって発動することができ

る。心の工夫は、胸をいかに「虚」の状態に保つかにある。心が「虚」の状態にあるとは、本来の心そのものである。また『言志叢録』第108条では「心体は虚を尚^{たつと}び、事功は実を尚^{たつと}ぶ。実功と虚心と、唯だ賢者のみ之れを能くす。」と述べられている。すなわち、心の本体が「虚」であることの重要性が如実に示されている。また心を「虚」にし、一方で具体的な事柄には対処していくという実功の重要性をうたっている。心の本体は「虚」を尊ぶ。「虚」であるからこそ、他人の心を理解でき、またいかようにも心を満たしていくことができると思われる。

(2) 心が「虚」の状態にあることによる効用

心が「虚」の状態であることを、『言志四録』では「胸臆虚明」(『言志録』第161条)、「心気精明」(『言志録』第284条)、「胸次虚明」(『言志晩録』第5条)、「胸次清快」(『言志叢録』第76条)というようにさまざまに表現している。いずれも「素直な心」の状態につながるものである。このような心の状態であるならば、「神光四発」(『言志録』第161条)し、「能く事の機を知り、物の先に感ず」(『言志録』第284条)ことができ、「感応神速」(『言志晩録』第5条)であり、「人事百艱も亦阻ならず」(『言志叢録』第76条)、心の発動のままに何事にもスムーズに取り組むことが可能になる。

心が「虚」の状態であることは、先にも述べたように何事にもとらわれず、執着しない心の状態であり、従って目の前のことに心をすべて発動し、心と体を一致させて取り組むことができる。すなわち心が「虚」の状態であるからこそ、心が現在のことに向き合える。そのことを『言志晩録』第175条では「心は現在なるを要す。事未だ来らざれば邀ふべからず。事已に往けば追ふべからず。」と述べられている。「心が現在なる」がこそ、目の前のことに心を発動させることが可能となる。また人間は、現在の一瞬一瞬を生きているのであり、それゆえにこそ、目の前のことを^{すて}いてねいに真心を込めて取り扱うことが必要となる。このことを『言志後録』第107条では「人は須らく先づ^{すべか}当下を料理すべし。」とか、『言志後録』第15条では「当下の事、^{すなわ}即ち急務実用の事なり。」と述べられている。いずれにしても心が何事にとらわれない「虚」の状態であるからこそ、現在のこと、目の前のことに集中して取り組むことが可能となるのである。

心が「虚」の状態であるとは、繰り返しになるが、

心が何事にもとられることなく、目の前のことに心の全量を発揮できる状態のことであり、またそれが行動に結びつくものである。この「虚」の状態こそが「素直な心」の状態であると思われる。「素直」であるからこそ目の前の学びの対象を自然と受け入れ、学ぶ心を発動することが可能となると思われる。

(3) 「虚」の状態、「素直な心」をつくるための工夫

「虚」の状態をつくるための心の工夫とは何か。これは簡単に言えば「誠を尽くすこと」といえるだろう。あるいはあらゆる物事に対して誠心誠意対処すること、といえるだろう。これについては、『言志叢録』第66条が参考になる。同条においては「人心の靈なるは、太陽の如し。然るに但だ克伐怨欲、雲霧のごとくに四塞すれば、此の靈烏くにか在る。故に誠意の工夫は、雲霧を掃ひ白日を仰ぐより先なるは莫し。凡そ学を為すの要は、此れよりして基を起す。故に曰く、誠は物の終始なり、と。」と述べられている。すなわち、「虚」の状態である心は、まさに靈性を備えており、その状態はあたかも太陽のごとくあるものである。しかしながら、その太陽の光を遮る雲霧が「克伐怨欲」であり、それを一掃しなければ、靈なる心の全量は発揮されない。その雲霧を一掃するのが、「誠意の工夫」となる。「学」をすすめるための基盤となるのが「誠意の工夫」を尽くすことといえる。心が「虚」の状態であることが太陽の状態であり、それを遮る雲霧として「毀譽得喪」を挙げているのが『言志叢録』第216条である。同条では、「毀譽得喪は、真に是れ人生の雲霧なり。人をして昏迷せしむ。此の雲霧を一掃すれば、則ち天青く日白し。」と述べられている。太陽の光で充ちた心の状態が「虚」の状態であり、その心の状態を「天青く日白し」と表現している。まさに「青天白日は我が心に在り」である。

以上のように、「素直な心」は、心を「虚」の状態に保つことによって発動するものであり、その「虚」の状態こそが、心が自由自在に対象に対して主体を発揮できる状態であることを指摘した。「学び」の要素としての「素直さ」の心の状態としての「素直な心」は、その「学び」の対象に対して、全量を発揮し、それを吸収消化することとなる。

3) 「感謝の心」：日常の「学び」の促進

「あらゆるものが自分を磨く砥石である」ととらえて、自らを磨く。あらゆる状況においても積極的な精

神を失うことなく、物事に取り組んでいく。自分の回りの人・物・事に対して真心を込めて接していくことにより、自らの心が磨かれていく。自分に苦言を呈してくれる人、厳しく指導してくれる人に感謝する。感謝の心は、自分を磨いてくれる対象となる人、物、事をプラスの側面からみるのであり、積極的な精神もそこから生まれてくる。

人間の「学び」は「感謝の心」によって、さらに促進されていく。誰も人間関係の中においては、「カチン」とくる一言を投げかけられたりすることがある。そこで「カチン」ときたとき、瞬間的には腹を立てるのは仕方がないが、まさにその「カチン」によってこそ自分自身が磨かれるのである。日常生活を通して、自らを磨いていくという発想がそこにみられる。

『言志四録』の中には、人間が日常生活を通して、あるいは日常生活で遭遇する様々な出来事等を通して、人間を磨いていくという内容の条文が随所に見られる。例えば『言志録』第58条では「山岳に登り、川海を渉り、数百里を走り、時有時か露宿して寝ねず、時有時か饑うれども食わず、寒けれども衣ず、此は是れ多少実際の学問なり。」と述べられている。具体的に行動し体験し、それに基づく思索を通して学ぶことの重要性を端的に示している。人間の活動、困難な経験すべてが「此は是れ多少実際の学問なり。」である。実際生活に即した生きた学問を学ぶことが重要であることを示している。

人間は環境とのかかわりの中で生活する。人間は生活を通して、生活上の体験を通して自らを磨くことが可能となる。つらく厳しい経験も自らを磨く学問となる。

『言志録』第59条には「凡そ遭う所の患難变故、屈辱讒謗、弘逆の事は、皆天の吾才を老せしむる所以にして砥礪切磋の地に非ざるは莫し。君子は当に之に処する所以を慮るべし。」と述べられている。この条文はたいへん厳しい内容ではあるが、絶望的な状況においても活路を見いだす、一筋の灯りに匹敵する内容であると思われる。まさに「凡そ遭う所の患難变故、屈辱讒謗、弘逆の事（思い通りにいかないこと）」が、「砥礪切磋の地（人間を磨き上げる場）」と考えられるのであれば、自ずから「感謝の心」がわき起こってくる。また、このような心をもって日々の生活を送ることが肝要である。

『言志晩録』第204条には「藥物は、甘の苦中より生ずる者多く効有り。人も亦艱苦を閱歴すれば、則

ち思慮おのずか自ら濃くかつこう、恰好かんなんしんに事を済こす。此れと相似たり。」として、艱難辛苦が人間を磨くことの妙が述べられている。また『言志叢録』第31条には「困心衡慮こんしんこうりょは、知恵を発揮し、暖飽安逸だんぼうあんいつは、思慮を埋没す。猶ほ之れ苦種の薬を成し、甘品の毒を成すがごとし。」と述べられており、逆境にあって心を苦しめ、思いを致すことにより、創意工夫が生じ、知恵が発揮されていくことが述べられている。また、何ら不足のない満ち足りた生活は、知恵を埋没させてしまうことを合わせて述べている。

日常生活に対して「感謝の心」を抱くためには、日常生活で接する人や物事に対して真心を込めて接することが必要である。『言志晩録』第221条には「事に処し物に接して、此の心を錬磨すれば、則ち人情事変すなわも亦一併に錬磨す。」と述べられている。まさに陽明学でいう「事上錬磨」、すなわち生活の中で事に処し、人・物に接することを通して自己を陶冶することが、端的に述べられている。人間は、生きることそれ自身が教育であり、学習である。人間が接する日々の事柄、物事、または社会の人間によって人間が磨かれていく。

このように、『言志四録』の中には、学びのための「感謝の心」を醸成するための工夫が随所にみられるが、その中でも『言志晩録』第263条は、日々の営みによって自らを磨くことの重要性や、感謝の心を抱くための要諦が、明白簡易に記述されていると思われる。すなわち同条には「多少の人事は皆是れ学なり。人謂ふ、近来多事なれば学を廢す、と。何ぞ其の言の纏あやまれるや。」と述べられている。特に「多少の人事は皆是れ学なり。」は、仕事即学び、日常生活即学び、人生即学び、であり、事上錬磨を明白簡易に記したものといえる。この『言志晩録』第263条は、簡単にしてきわめて奥が深く、また人間の学びの極意をついていると思われる。人間の日々の生活そのものが、人間の日常の仕事、取り組む物事が、そして接する人々が、まさに自らを磨く学の対象であり、真心を込めて、それらの仕事、物事に取り組み、人々に接することの重要性が述べられている。昔から「日常生活が人間をつくる。」とよくいわれるが、この第263条の精神があつてこそである。そして、この第263条が絶えず念頭にあるならば、自らの周りの人、物、事に対する感謝の念、すなわち「自分を学ばせてくれてありがとう。自分を磨いてくれてありがとう。」という感謝の念がおのずと沸き起こってくると思われる。この第263条は、短い、簡単簡潔な言葉であるが、心にぐっと迫り来る

ものがある、そのような迫力を持つ一節であり、「学び」の工夫、「学び」の知恵そのものといつてよいだろう。この精神が絶えず念頭にあるならば、日常生活、ひいては人生を充実して送ることが可能であると思われる。また、さまざまな体験活動が自らの「学び」となって昇華されることになるとと思われる。

最後になるが、「学び」のために「感謝の心」を抱くためには、絶えず自らに自己反省の矢印を向けることが必要である。そして自らの環境を、自らの在り方生き方や具体的な行動の結果が現象化されたものにとらえ、環境を変容させるためには、自らを改善・変容させることが必要であることに気づくことが必要である。そのことについて、佐藤一斎は『言志後録』第16条において、「人 或は謂ふ、外物累がいぶつるいを為すと。愚は則ち謂ふ、万物は皆我れと団体にして、必ずしも累るいを為さず。蓋し我れ自ら累するなり、と。」と明白簡易に述べている。「煩いは自分にあり。」「原因は自分にあり。」と矢印を自分に向けるべきと述べているのである。人は何事においても、自分の周りの環境のせいにしがちである。しかしながら、その環境の在り方を決めるのは、自分自身、自己、自分の心である。従つて、繰り返しになるが、自らの環境を改善するためには、自己を改善し、変容することが必要となるのである。

IV. おわりに

以上のように、本稿では、人間の「学び」についての筆者の定義をふまえ、人間の「学び」のための「立志」と「学びの三要素」としての「謙虚さ」、「素直さ」、「感謝の心」の実践のための心の工夫について、佐藤一斎の『言志四録』に散見される人間の「学び」にかかわる条文をもとに、考察を加えてきた。

筆者が定義した「学びの三要素」である「謙虚さ」、「素直さ」、「感謝の心」を心に備えること、心をそれらの要素で満たし、具体的な日々の行動に臨むことの必要性、重要性については、多くの人が認識していることであろう。しかしながら、これらの要素を自らの心の中に常駐させるためには、自らの行動に即した具体的な心の工夫が必要であることを認識している人は少ないのではないと思われる。また、心の工夫が必要であることは認識していても、どのように工夫すればよいかを具体的に理解できていない人も少なくないのではないと思われる。本稿において、そのような

人に対して、心の工夫の実践の一端を示すことができるならば、そこに本稿の意義がいささかでも見いだされるように思われる。

注

- 1) 山崎道夫著『佐藤一斎』（シリーズ陽明学・24）、明德出版、平成7（1995）年、59頁。
- 2) 同上書、59頁。
- 3) 佐藤一斎は、1772（安永元）年、美濃岩村藩の家老の次男として江戸藩邸で誕生した。名は坦、字は大道、通称を捨蔵といい、一斎は彼の号であった。1805（文化2）年、34歳で林家の塾頭となり、1826（文政9）年、55歳で岩村藩家老、1841（天保12）年には70歳で幕府儒官（昌平黌教授）となり、昌平黌の学問と教育を主宰した。そして1859（安政6）年に88歳で昌平黌の官舎で没した。
- 4) 『言志四録』は、『言志録』、『言志後録』、『言志晩録』、『言志叢録』からなり、全編1133条で構成されており、佐藤一斎が42歳から書き始め82歳までの41年間にわたって筆録したものである。『言志録』は、一斎が42歳の時（1813（文化10）年）に書き始めて以後約11年間にわたって書いた246条からなるものである。『言志後録』は、一斎が57歳以後、約10年間にわたって書いた255条からなるものである。『言志晩録』は、一斎が67歳より78歳までの約12年間に書いた292条からなるものである。『言志叢録』は、一斎が80歳の時（1851（嘉永4）年）に起稿し、2

年間に340条を書き上げたものである（川上正光全訳注『言志四録』（一）講談社学術文庫、昭和53（1978）年、12-13頁。）。

- 5) 本稿における『言志四録』の条文の書き下し文は、岡田武彦監修『佐藤一斎全集』第11巻、第12巻（明德出版社、平成3（1991）年）に従った。
- 6) その外にも『言志録』第22条、『言志後録』第18条、『言志叢録』第14条、第22条、第23条、第24条、第26条、第142条等、多数あげられる。
- 7) なお同条文と同じ内容のものとして、『言志叢録』第187条がある。同条には「忠の字は、宜しく己れに責むべし。諸れを人に責むること勿れ。恕の字は、宜しく人に施すべし。諸れを己れに施すこと勿れ。」と述べられている。また、同じく『言志叢録』第188条には「妄念起る時は、宜しく忠の字を以て之れに克つべし。争う心起る時は、宜しく恕の字を以て之れに克つべし。」と述べられている。

参 考 文 献

- 1) 山崎道夫著『佐藤一斎』（シリーズ陽明学・24）、明德出版、平成7（1995）年。
- 2) 川上正光全訳注『言志四録』（一～四）講談社学術文庫、昭和53（1978）年。
- 3) 岡田武彦監修『佐藤一斎全集』（第11巻、第12巻）明德出版社、平成3（1991）年。
- 4) 山瀬代次郎著『佐藤一斎と其門人』南陽堂本店、大正11（1922）年。